

黒水城文献『慈覺禪師勸化集』の出現

椎名宏雄

一、黒水城出土の禅宗文献

一九九六年から上海古籍出版社によつて影印出版中である「俄藏黒水城文献」（以下「黒水城」と略称）の豪華本叢書は、斯界瞠目の大出版物である。二〇世紀の初め、ロシアの探検家コズロフが、カラホト（黒水城、現在の中国・内モンゴル自治区西北）遺跡で収集してから一世紀、その出土文献の精華が初めてまとまつた形で公開されたからである。

現在、原物はロシア科学院東方学研究所サンクトペテルブルク分所に所蔵され、その総数量は八千点にのぼるといわれる⁽¹⁾。それらの文献は、宋・西夏・金・元の各国における写本と刊本とされ、そのうちの約九〇%は西夏文、約一〇%近くが漢文、その他若干の民族文字による文献であるという⁽²⁾。西夏文の仏教文献は約四百種、一千卷とされるから、西夏の仏教史解明にとって、これは資料の一大宝庫である。

知るとおり、西夏国は一一世紀の初めにタングート族が、敦煌を含む河西地方全土を支配し、一〇三八年に建国した王国である。以後、一二二七年にジンギスカンによつて滅ぼされるまでの一九〇年間にわたつて存続した。西夏は独自の文字を創り高度の文化をもつていたが、とりわけ熱心な仏教国家であり、建国の一一世紀中に宋から漢文大藏經を入手すること六回に及んでいる⁽³⁾。のちに第五代皇帝仁宗（一二三九～一九四在位）の時には、西夏文の大藏經出版を企てたとされ、われ、仏教の盛行状況をよく物語つてゐる。支配地域には漢民族の居住も非常に多かつたので、漢文の仏典も少なからず流通したのである。

さて、「黒水城」の第一冊から第六冊（二〇〇〇年刊）までは漢文文献を收め、約五百種を影印している。ちなみに、第一冊の首部には克恰諾夫（クチャノーフ）・史金波・李偉國の三者による出土文献全般についての各長文の「前言」が置か

れ、また、第六冊の末尾には附録として、孟列夫（メンシコフ）・蔣維崧・白浜の共著による全収録文獻の書誌解題「叙錄」を掲載するなど、そこぶる學術的な配慮もほどこされている。

これらの漢文文獻の中には、これまで断片的ながら調査・紹介されたものもあり、また、何種かの目録も公表されはいる⁽⁶⁾が、「黒水城」収録文獻のはばすべては初公開である。大部分は仏典であり、その中の約七割が刊本、その他が写本であつて、いずれも中国の一般歴史や仏教史の上に、貴重な資料提供となつてゐる。

筆者がこれら六冊を通覧したところ、禪籍とみなされるものは、断簡や紙背墨書なども含めると一〇数種である。それらを収録順に挙げると、つぎのとおりである。

- 1、TK一三二 慈覺禪師勸化集（刊本）〈第三冊〉
- 2、TK一三三 刊外錄（刊本）〈第四冊〉
- 3、TK一五八 灰頌心經（刊本）〈第四冊〉
- 4、TK一五九 夾頌心經（刊本）〈第四冊〉
- 5、TK一八六 注清涼心要（刊本）〈第四冊〉
- 6、TK二五四 中華伝心地禪門師資承襲図（刊本、断簡）〈第四冊〉
- 7、TK三三三 発菩提心要略法門（刊本、断簡）〈第五冊〉
- 8、A四V 照心図一本（写本）〈第四冊〉
- 9、A二〇V 仏印禪師心王戰六賊出輪廻表（写本、断簡）〈第四冊〉
- 10、A二〇V 亡牛偈（写本）〈第四冊〉
- 11、Φ二二九V 景徳伝燈錄卷十一（写本、首次）〈第六冊〉
- 12、NHB一〇四四 「禪宗文獻」（写本、断簡）〈第六冊〉
- 13、NHB一三六六A 五更転（写本、断簡）〈第六冊〉
- 14、NHB二〇一〇 「禪宗文獻」（刊本、断簡）〈第六冊〉

右の文獻中、すでに紹介されているものが若干ある。まず11の「景德伝燈錄」（写本）は、早くから敦煌出土文獻と誤つ

て紹介されていたのであるが、近年になつて栄新江氏の精査・報告により、まぎれもなくコズロフ収集のカラホト出土文献であることが確認された⁽⁷⁾。文は【景德伝燈錄】卷一の首部を欠く巻末までの部分であるが、これは数ある同書の異版中、北宋末期に福州東禪寺から開版された大藏經所収本のテキストの同部分の文字と完全に一致するという⁽⁸⁾。とすれば、この写本は直接か間接かは不明ながら、遠く江南の藏經本を承けている可能性が高く、同藏經の伝播流通の状況を知る上からも注目すべき遺品といえる。

つぎに、6の【中華伝心地禪門師資承襲図】は、わずかに四面だけを遺存する刊本の断簡であるが、前記の「叙録」ではこれを宋版または西夏版と記載している。ところが、【黒水城】収録の漢文文献全般に対して、いちばんよく着目された竺沙雅章氏によつて、右の断簡中に遼国の避諱法がみられることから、該書は遼朝道宗（1055—1101在位）時期の刊本であると考証されている⁽⁹⁾。してみると、この禪籍は遼から西夏へと伝來した文献の遺存であり、禪籍の文献史や禪宗史の上からはきわめて貴重な資料といえる。

つぎに3と4は、両者ともに日本では【少室六門（集）】の第一門の「心經頌」として伝来してきた禪籍の異本である。該書は、内容からして唐代に菩提達磨に仮託して述作された禪籍とされているが、西夏版の両書は初期禪宗史や禪籍史の上からは重要なテキストであるため、筆者は別にこの両書について検討をくわえている⁽¹⁰⁾。西夏版の仏典の中では、当該の【夾頌心經】中の一本は、最も早い1073年の刊行という貴重文献でもある。

また、4の【注清涼心要】（注心要法門）一巻については、前述の栄新江氏が【景德伝燈錄】卷一⁽¹¹⁾を黒水城文献と論証する際に、これら両書の末尾に【李醜兒宅藏記】なる同一の旧蔵印が捺されていることを、【景德伝燈錄】が黒水城文献であることの証拠の一つとしている。栄氏はここで【注清涼心要】の書誌的解説を、メンシコフ編【カラホト出土漢文遺書叙録】から引いているが、かなり詳しい解題であり、その概要が知られる。それによれば、【注清涼心要】は詳題「圭峯蘭若沙門宗密注順宗皇帝所問心要法門華嚴疏主清涼國師澄觀答」の木版完本であり、一二世紀初めの宋版とされる。わが続蔵経には【華嚴心要法門註】一巻として収録されている（新纂版第五八巻）ものの異本である。純粹な禪籍とはいえないかもしれないが、宗密が註を付した古書であるため、あえて右のリストにくわえた。

以上のほかの漢文禪籍については、筆者は寡聞にして紹介されたものを知らない。そこで小稿では、1の【慈覺禪師勸

化集」、およびその一部分をなす7について紹介することにしたい。この文献は、これまで伝本の知られぬ新出資料であるから、以下において本書の書誌や文献史的考察、および内容の紹介を行い、末尾に本書の翻刻をしておく。

二、『慈覚禪師勸化集』

「慈覚禪師勸化集」(以下「勸化集」と略称)一巻は、「黒水城」ではTK一三三一號、メンシコフの『カラホト出土漢文遺書叙録』(略称「孟黒録」)では二二五号とされている文献である。前述の「叙録」では本書の書誌的事項をかなり詳しく記載するが、翻刻との重複を避けて首部のみを左に引いておこう。

TK一三三一 慈覚禪師勸化集 孟黒録二二五

宋刻本。蝴蝶装、白口、版心題「化文」、下有頁碼。共四五頁、第三頁左半缺。紙幅高二〇・三、寛三一・二。版框高一六・八、寛二四・五、天頭二、地脚一・五。每半頁八行、行一五字。上下單邊、左右双邊。宋体、黑色中。(後略)
以下は、序文・目次・内題・編者・尾題などを記す。筆者の見るところでは、文字はやや太めで堂々とし、迫力ある精刻本である。刊記や刻工名はなく、欠筆もみあたらない。巻末には尾題を置いた後に六文字ほど右半分だけが見えて、他は損亡している。これは、第四字目と五字目は「佛憫」らしいが、元來は跋か題記があつたのであろうか。惜しい損亡である。

序題・尾題はともに「慈覚禪師勸化集」であるが、内題は「鎮陽洪濟禪院慈覺和尚勸化文并偈頌」とあり、次行には「門人普惠編」と編者名が記されている。鎮陽とは鎮州で唐代や五代の呼称であり、宋や金の時は真定府と称した地名。現在は河北省石家庄市に属する。

つまり、本『勸化集』は著名な『禪苑清規』の撰者として知られる、真定府洪濟禪院慈覺禪師宗蹟の撰述書にはかならない。しかし、これまで本書の伝本はまったく知られず、また宗蹟の所伝記事をはじめ、内外の諸書目や記録などにも本書の名はみいだされない。ただし、「龍舒增廣淨土文」卷一¹¹は宗蹟の「勸參禪人兼修淨土」の一文を収録したのち、編者のコメントとして「右蹟禪師語見禪師勸化集中」とあり、「勸參禪人兼修淨土」はたしかに新出の「勸化集」の首部に「蓮池勝会錄文」の名で全文が収録されているから、右のコメントは「龍舒增廣淨土文」が編集された紹興三〇年(一一

六〇）當時、「勸化集」が存在していたことを立証するものである。この事実はまた、他の宋元代における淨土教系統の仏典中に散見される宗蹟の著述中、「勸化集」に含まれるものが多くは、ここからの抄録であることを推察させることからも重要である。なお、本書の編者普惠については、遺憾ながら未詳である。

さて、本書の構成は左記のとおりである。

一、序文 崇寧三年（一一〇四）、崔振孫撰

二、目録（一六篇の目録）

三、本文（一七篇）

右のように、いたって簡単ではあるが、目録と本文の篇名とでは詳略の別が三篇についてみられる。また、目録では第一六篇目は「人生未悟歌二道」とあるが、本文では「人生未悟歌 輔國大師撰」と「未悟歌 郎師撰」との二篇となつている。これらの撰者、輔國大師も郎師も未詳の人であるが、要するに宗蹟とは別人の述作が本書には付録的に収められているものと考えられる。

まず、崔振孫による序文をみよう。本文は翻刻したので、ここでは意訳的な訓読文を掲げる。

慈覺禪師勸化集の序

朝請大夫、前通判、成徳軍府事、上柱国、賜紫金魚袋の崔振孫が譲る。
実際理地は、一塵も受けず、言語道断は千聖も伝えず。故に釈迦は室を摩竭にて掩し、淨名は口を毗耶で杜ぐ。
事相門中は一法も捨てざる故に、諸仏菩薩は一大藏教を伝え、歴代祖師は宗風を垂示し、乃至は一句一偈や警咳動作
も、仏事にあらざることなし。

慈覺禪師は、正法眼を伝え、久しう道場に坐し、其れ偈・頌・文・贊を為りて仏心を直指さざるは莫く、道の妙足
なるを發揮し、以つて人天の耳目を開きて、苦海の津梁為り。門人が録を編んで集と成し、余に序を為るよう属む。
余は素より師を知るゆえ、者の義は辞み得ず。是に崇寧三年（一一〇四）九月初八日に序す。

撰者の崔振孫については、これだけの肩書きが付けられているにもかかわらず、目下のところ未詳である。成徳軍はさきの鎮州と同一地方の行政単位名であり、五代や宋の時に復廢を繰り返した呼称である。しかし、真定府関係の地方志に

は、この人の名はまだ見出していない。芙蓉道楷（一〇四三—一一八）の法嗣に朝請崔公居士なる人がいるが、その同異は不明である。

ともあれ、崔振孫は北宋期における河北地方の高官であつて、宗頃とは以前からの知己であつた。宗頃の禪淨両面の宗風にも通曉していたことが、右文から判明する。この序文は本書の刊行序とみられるから、本書は崇寧三年ごろに刊行されたのである。いつたい、黒水城文献には世に稀れな北宋版が一〇余種も存在するとされるが、本書もその中に含まれる可能性がある。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|------------------------|----------------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|---------------------------------------|------------------|------------------|-----------------------|------------------|--|---|----------------------------|----------------------------|---------------------------------|-----------------|--------------|---------------------------|--------------------------|---------------|--|
| 17 未 | 16 人 生 悟 歌 | 15 公 門 仏 事 并 頌 | 14 鄆 中 仏 事 | 13 軍 門 仏 事 | 12 豪 門 仏 事 | 11 事 親 仏 事 | 10 在 家 菩 薩 修 行 儀 | 9 自 警 文 | 8 坐 禪 儀 | 7 戒 酒 肉 文 | 6 淨 土 頌 | 5 勸 念 仏 阿 弥 陀 仏 防 退 方 便 | 4 發 善 提 心 要 略 法 門 | 3 念 仏 發 願 文 | 2 念 仏 懺 悔 文 | 1 蓮 池 勝 會 錄 文 | 慈覺禪師勸化集 1104 | 禪苑清規 1103 | 長蘆頃禪師文集 ~1116 | 龍舒增廣淨土文 1160 | 樂邦文類 1200項 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | (蓮華勝会序) | 勸參禪人兼修淨土(卷一、T47、283~284c) | 蓮華勝会錄文(卷二、T47、177b~178b) | | |

さらに、禪籍史や宗蹟研究の上から重要なのは、右の年時である崇寧三年は、「禪苑清規」が初めて刊行された崇寧二年の翌年だということである。「禪苑清規」一〇巻は現存する最古の禪門清規であり、後世に大きな影響を与えた重要禪籍である。いっぽう、「勸化集」は後述のように、あらゆる階層の在家人に対しても仏教帰依を説き勧める化導の文集といえる。このように禪門修道者を対象とした厳格な生活規範と、在家者への平易な入門化導のための両書を、ほぼ同時期に発刊した宗蹟の姿勢には、改めて驚かざるをえない。

【勸化集】の本文一七篇の中には、名称を異にする場合もあるが、前述のように他の仏典中にも含まれているものがある。それらの収録状況を对照して示したのが前頁の表である。

ただし、右表中「禪苑清規」については、じつは最古のテキストを承けるとされる高麗版には、8910の三篇が存在しない。¹⁴また、「長蘆頃禪師文集」なる書は伝存せず、わずかに律宗の元照（一〇四八—一一六）が撰述した「長蘆頃禪師文集序」¹⁵によつて知られるのみであり、そこに述べられている篇名を对照した。対照表によつてわかるように、「勸化集」が新たに提供する資料は、一七篇中、24711—17の一〇篇ではあるが、既存の篇でも抄録であることが判明したり、文字語句に大差があるなどのため、あえて全文を翻刻するしだいである。

三、本書の内容

【勸化集】は前述のように、全一七篇の作品を集成したものである。既存の文献によつて知られるものは、表示したとおりである。以下、本書の各篇についてそれらとの異同、および内容の梗概について略述し、紹介することにしたい。

1 蓮池勝会錄文

本編は「樂邦文類」卷二所収のものはほぼ同名であるが、「龍舒增廣淨土文」卷一では「勸參禪人兼修淨土」とされている同一文である。後者のほうが本篇の内容を具体的に示している。いずれの文も末尾に、元祐四年（一〇八九）冬に宗蹟が夢の中で「蓮池（華）勝会錄」の名称を名づけたという靈譚を付記している。内容は、大衆に対して弥陀の名号を口誦して淨土往生を願うべき理が示される。「糸氏稽古略」卷四などが、元祐四年に宗蹟が蓮華勝会を結んで普ねく道俗に念仏を勧進したとするのは、右の付記を敷衍したのではないであろうか。

2 念仏懺悔文

本篇は目下のところ他に見いだせず、本書のみの新出資料かと思われる。比較的長篇の一文であり、内容は衆生がいかなる重罪を犯しても、弥陀に懺悔することにより、弥陀の願力によつて罪障消氷する趣旨を説き示している。

3 念仏発願文

本篇は從来、「樂邦文類」卷二所収の「念仏回向発願文」として知られていたものと同内容。ただし、本篇のほうがはるかに分量が多く、「念仏回向発願文」はおそらく本篇からの抄録であろう。文意は、念仏によつて衆生攝化することを発願するもの。

4 発菩提心要略法門

本篇も他に伝存するものを知らない。わずかに、逸書である「長蘆贊禪師文集」の中に「發菩提心要」として収められていたことが知られる。本篇は篇目の下に割行で「依華嚴・悲華二經集」とあり、宗頃がこれらの両經典の語句を依用して、毎日唱えるべき發菩提心の諷誦文としたものと思われる。文は短文で平易である。

なお、「黒水域」の前掲⁷のTK三三三号は西夏刻本の「仏說無常經」に続き、本篇と同じ「發菩提心要略法門」を首題を含めてわざか四行のみ合収している。異版であるから、本篇が宋版を重刊して流行したことをものがあるものである。

5 勸念仏阿弥陀仏防退方便

本篇は、「樂邦文類」卷二の「念仏防退方便門」と同卷五の「勸念佛頌」七言絶句四首とを合わせた形をとるものである。ただし、「勸念佛頌」は前半の二首のみだけで、後半の二首は存在しないという相違がある。したがつて、「樂邦文類」のほうの典拠については未詳である。ただ、前述の「長蘆贊禪師文集」には「勸念佛頌」が収められていたことが知られるから、あるいはこの書が典拠であったのかもしれない。本篇は短文と偈頌から成るが、念佛の唱名により衆苦が防退されることを趣旨とする。

6 淨土頌

本篇は、「樂邦文類」卷五所収の「西方淨土頌」五言絶句二六首に該当するが、本篇はその末尾にさらに七言八句が加わった形となつてゐる。これらの偈頌全体は、西方淨土の極妙なる風光が禪悦に等しいことを詠じたもので、禪淨一体の

趣旨が明瞭に示されている。ただし、「樂邦文類」の編者は、本篇末尾にみられる「極樂不離真法界 弥陀即は自心王」などの禪趣を嫌つて七言偈を削り、篇名にも「西方」を加えるなどして、若干淨土色を強くしたことが考えられる。

7 戒酒肉文

本篇は、目下ほかにみいだし難い短文である。趣旨は、酒肉の飲食は有情の殺生や万禍の根源となるので、これらをやめて蔬食にすべきことの勧めである。在俗の信者に対する教示である。

8 坐禪儀

本篇は、通行の「禪苑清規」卷八に収められているものと同種である。いうまでもなく、禪門で現存最古の坐禪作法書として知られている。いま、本篇を宋版「禪苑清規⁽¹⁷⁾」のものと対校すると、一〇数文字の異同がある。両者一長一短であるが、今後は大いに注目すべきであろう。

9 自警文

本篇も「禪苑清規」卷八に収録のものと同じであるが、二文字の異同がある。趣旨は、修道者としての自らを顧みて道心を警策する短文の語句である。格調が高く、僧俗共に誦誦させるために著わされたものとも考えられる。

10 在家菩薩修行儀

本篇もまた、「禪苑清規」卷一〇では「勸檀信」の名で収められている。しかし、両者を対校すると、「勸化集」のほうが三か所にわたって一九文字も多く、別に一文字の相違がある。つまり、本書のほうがより詳しい。趣旨は、在家の信者が修行し守るべき八か条の訓戒が中心となつていてる。

11 事親仏事

本篇から末尾の17までの七篇は、従来ほかに知られぬ新資料であろうと思われる。本篇は、病氣療養中の両親に対する介護指南の書であり、特に食事に関する細かな注意、寒暖に応じた衣服臥具の措置等が注目される。しかも、これらは世間の孝に過ぎず、父母に帰依三宝や發菩提心を勧め、三毒を調伏し因果を信じ聖容を瞻礼するなどにより大事を発明し、念佛三昧や宴坐につとめて成仏の因とすることが永劫の孝事であると説き示している。ゆえに、ここでは宗續の仏儒一致の思想が明確に示されている。

12 豪門仏事

富裕者に対する仏道修法の説示である。すなわち、金銭や財産は夢幻のようなものであるから、治生産業は利他を願い無私の心で行うのが大人であるとする。また、家財は等第に管理して衆生済度に用いるのが世間に傑出した孝であり、円頓大乗の入位であり普賢の行応であると説く。したがつて、ここでも宗頃は仏道実践を孝の理念と結合して勸化していることが知られる。

13 軍門仏事

軍人が修行の道であることを参詳すれば、仏説も見性も分明となる理を説く。また、報國と父母孝養を忘れず、けつしてすさんだ生活をしてはならないこと、駐営の際も土地の民衆に対して菩薩行で接すれば、かならず竜天の擁護があること、などとも説いている。このような、軍門に対する仏法化導の教示は珍らしく、宗頃の宗教教化者としてのスケールの大きさを示すものであろう。

14 郷中仏事

本篇は、篇目の下に割注で「普勸諸行百戸修真実慈悲行」とあるとおり、市井の庶民に対する生活万般上の心得と、仏道を修め慈悲行を実践すべき勧めである。文は比較的長文で、日常の用心を詳細に説き示している。禪門祖師の機縁公案の名称を庶民たちの生業万務になぞらえ、みな直下に承当すれば成仏の分ありと表現するなど、宗頃が応機接物の接化利生にすぐれていたことを知らしめる一篇でもある。

15 公門仏事并頌

官吏に対して菩薩行の実践と念仏の法門を示す一〇か条の説示と、各条項の主旨を七言四句で詠じた偈頌を配した一篇で長文。一〇か条とは、(一)回心向道、(二)忠報國家、(三)孝養父母、(四)不留獄訟、(五)寛恤罪人、(六)減省刑禁、(七)用法從輕、(八)護持三宝、(九)全身遠害、(十)隨力修行、であるが、(一)から(三)までと(八)(十)が自利、(四)から(七)と(九)が利他といえる。公門者に対する仏事の勧めとしては、「龍舒増広淨土門」卷六に「勸在公門者」なる短文の念仏往生の勧諭があるが、宗頃の本篇は多彩かつ具体的であり、はるかに優る。

16 人生未悟歌

選者の輔國大師については未詳であるが、おそらくは宗頃と関係の深い人ではなかつたかと思われる。不定型の長歌曲で、衆生が濁世で迷界に沈倫しているさまと、念佛往生の門に入ることの勧めを詠じている。読者をして切実な無常觀を起させ、無上道に入らしめるためのもので、表現は平易である。

17 未悟歌

撰者の郎師については、やはり未詳である。前篇と同傾向の短い歌曲であるが、表現は対照的に晦渋である。持齋念佛の勧めが王眼となつてゐる。

以上、本「勸化集」の内容について概観したが、著者が僧俗に対しても多彩な方法手段によつて、生活の自律と念佛や禪の実践を勧諭する文詞の集成であつた。それも、さまざま階層や職業の別によつて、あるいは格調高い文章で、あるいは平易な歌頌により、多種多彩な表現を用いた善言化導・創意工夫のさまがくみとられる。思想的にもまた、禪淨一致同修のみならず、孝道と仏道とを冥合同規とする融合的な姿勢も顯著である。総じて、著者宗頃の民衆化導に関する巾広い宗風が窺えるといえよう。あたかも、北宋末期の政状不穏による民心不安の世相に対して、崔振孫の序文がいうように、それは文字どおり苦海の津梁となつたことであろう。本書は河北で刊行流通したが、のち宗頃が住した長蘆寺時代に刊行された「文集」にも七篇以上が重複して収録されている。これは、宗頃の文詞が広く江南でも受容されたことを物語るものであり、注目してよい。

宗頃の著作としては、小稿で言及したもののはかに、「樂邦文類」卷二に「觀無量寿經序」、「緇門警訓」卷八所収の「誠洗麌文」²⁰などの小篇が知られている。「文集」や「葦江集」²¹が早くから伝を絶ち、近代まで伝存した「慈覺禪師語錄」三巻の存否も不明²²となつてゐる現在、本「勸化集」が出現した意義はそこぶる大きい。近年、大陸の中州古籍出版社から刊行された点校本「禪苑清規」²³は、附編に宗頃の全著述を蒐集している好著であるが、惜しむらくは「勸化集」への闇説はない。

従来、宗頃に対する研究についていえば、まとまつた伝記資料を欠くといふらみこそあるが、概して「禪苑清規」の作者としての厳格性と、禪淨双修者としての思想的方面からのみなされてきた。²⁴しかし、本「勸化集」や右の点校本など

が公開され、宗頃が予想以上に広い宗風を挙揚展開した宗匠であったことが明らかになると、今後は從来ふれられていない宗蹟と高官・民衆との接点や、所住寺院の社会経済史的背景の考察が必須であると考える。それはまた、既存の作品、たとえば『禪苑清規』制定の背景や理解の範囲が飛躍的に拡大するものと確信する。

実をいうと、筆者はこのたびそうした方面を解明すべき若干の新しめ資料をも用意したのであるが、その論述にはまだかなりの紙幅を要するので、これは次の機会とし、今回は新出文献の紹介のみにとどめておく。

註

- (1) 史金波・白浜・克恰諾夫主編『俄藏黒水城文献』第一冊（一九九六年一二月、上海、上海古籍出版社）前付、史金波氏の「前言」一頁。
- (2) 前項「前言」五頁。
- (3) 西田龍雄『西夏文華嚴經』I（昭和五〇年三月、京都、京都大学文学部）五頁に詳しい。
- (4) 前項、七頁。
- (5) 史金波『西夏仏教史略』（一九八八年八月、銀川、寧夏人民出版社）九四頁。
- (6) ロシア語の目録には、クチャノーフ等編『西夏文写本と刊本目録』（一九六三年、モスクワ、東方文学出版社）、メンシコフ編『カラホト出土漢文遺書叙録』（一九八四年、モスクワ、科学出版社）がある。なお、史金波氏は前掲（5）の著書の附録三に世界各國に所在する西夏文の仏教書目録を漢訳して所蔵者別に著録している。その中に禪籍とみられる仏典は一〇数点が挙げられる。
- また、西田龍雄氏は前掲注（3）の著書中、西夏文の『六祖大師法壇經』『禪源諸詮集都序』『中華伝心地禪門師資承襲圖』の三種について漢文伝本との異同等を検討し紹介しているのは貴重である（一六一～二一頁）。西夏文の禪籍については、解説という困難性があるため、その全体的な研究はまだ歳月を要するであろう。なお、既刊の『俄藏黒水城文献』第七冊（第一一冊の部分）は西夏文の「世俗文献」を収録するが、仏典は未刊である。
- (7) 栄新江著・衣川賢次訳『ロシア所蔵の景德伝燈錄』（『禪文化』一六一号、一九九六年七月）。なお、この論文中には夙に敦煌文獻として紹介された論文名も挙げられてある。
- (8) 田中良昭氏よりの「教授による」。
- (9) 竺沙雅章「黒水城出土の遼刊本について」（『汲古』第四三号、平成一五年六月）。

(10) 拙稿「カラホト出土の達磨大師『夾頌心經』」(『宗学研究』第四六号、二〇〇四年三月)。

(11) T. 四七、二八五 a

(12) T. 五一、五三六 a

(13) 『俄藏黑水城文献』第一冊前付の李偉國「前言」四頁。

(14) 鏡島元隆等「訳註禪苑清規」(昭和四七年七月、東京、曹洞宗宗務厅)卷頭の鏡島氏「解説」を参照。なお、本書の高麗版は崔法慧編「高麗板重添足本禪苑清規」(一九八七年四月、ソウル、民族社)の中に影印刊行されている。

(15) この序文については、拙著『宋元版禪籍の研究』(一九九三年八月、東京、大東出版社)四二一四四頁を参照。

(16) T. 四九、八七七 b

(17) 東洋文庫所蔵の嘉泰二年(一一〇二)重雕補註本。

(18) T. 四七、二七〇 a-b

(19) T. 四七、一六七 a-b

(20) 詳しくは「蹟禪師誠洗麵文」(T. 四八、一〇八一c)、一〇八四a)一篇であるが、元符三年(一一〇〇)一一月一日に宗蹟が撰述した洗麵を讃める文と、同趣旨の七言絶句四〇首から成る。「禪苑清規」卷四の理解に資する資料である。

(21) 宗蹟の「葦江集」については、「樂邦文類」卷三の「蓮社繼祖五大法師伝」末尾の宗蹟伝中に「葦江集有りて世に行わる」(T. 四七、一九三c)とあり、「廬山蓮宗宝鑑」卷四の「長蘆慈覺禪師」条にも「葦江集を撰す」(T. 四七、三三四c)とみえる。また「宋氏稽古略」卷四の元祐四年(一〇八九)の条には、一〇月に宗蹟が蓮華淨土念佛社を結んだことを「葦江集」を典拠として記載している(Z. 七六、六七四b)から、同書中には前掲の「蓮池勝会錄文」が含まれていたものと思われる。しかし「葦江集」も早くから伝を絶つたようである。あるいは「長蘆蹟禪師文集」と同一異名の書であったのかもしれない。

(22) 「慈覺禪師語錄」三卷三冊の天下一本高麗版については、大屋徳城「高麗朝の旧弊」(積翠先生華甲寿記念論纂)、昭和一七年八月)で紹介されたが、大戦後の存否は未詳となっている。拙稿「宋代の真州長蘆寺」(駒澤大学中国仏教史蹟參觀團編刊「中國仏蹟見聞記」第八集、昭和六二年八月)を参照されたい。

(23) 蘇軍点校「禪苑清規」(一〇〇一年一月、鄭州、中州古籍出版社)。なお、同書中には宗蹟の現存著作として上述の諸作品のほかに「勸孝文」(『樂邦遺稿』卷下所収(T. 四七、二四九a))と、同じく関説資料として「孝友文」一二〇篇の概要(『龍舒增広淨土文』卷六所収(T. 四七、二七一a))を掲載している。ただ、前者は抄録文であり、後者は貴重な記録ではあるが原文そのものではない。また、以上のほかに宗蹟撰述の逸文としては、「文集」の序文中にみえる「枯骨頌」がある。

(24) 「禪苑清規」に関する研究は古来きわめて多いが、近年では前掲注(14)『訳註禪苑清規』が刊行されてからは、前掲注(14)の高麗版影印本に付される崔法慧「禪苑清規解説」と前掲注(23)点校本が新しい成果である。また、宗墮の禪淨双修思想に関する研究も古来少くないが、近藤良一「禪苑清規に於ける淨土思想——その思想史的源流——」(『北海道駒澤大學研究紀要』第一号、昭和四二年一月)や服部英淳「淨土教思想論」(昭和四九年三月、東京、山喜房仏書林)第五章二「宋代禪僧の淨土觀」の洪濟宗墮の項、などがすぐれているが、その後はさしてみるべきものがないようである。

〔翻刻 慈覺禪師勸化集〕

慈覺禪師勸化集序

朝請大夫前通判成德軍府事上柱國賜紫金魚袋崔振孫譏
實際理地、不受一塵、言語道斷、千聖不傳。故釋迦掩室於
摩竭、淨名杜口於毗耶。事相門中、不捨一法故、諸佛菩薩、
傳一大藏教、歷代祖師、垂示宗風、乃至一句一偈嘒咳動作、
無非佛事矣。

慈覺禪師、傳正法眼、久坐道場、其爲偈頌文贊、莫不直指
佛心、發揮道妙足、以開人天之耳目、爲苦海之津梁。門人
編錄成集、屬餘爲序。餘素知師、者義不得辭、於是乎書崇
寧三年九月初八日序。

蓮池勝會錄文

夫以念爲念、以生爲生者、常見之所失也。以無念爲無念、
以無生爲無生者、邪見之所惑也。念而無念、生而無生者、
第一義諦也。是以實際理地、不受一塵、則上無諸佛之可念、
下無淨土之可生。佛事門中、不捨一法、則揔攝諸根、蓋有
念佛三昧、還源要術、示開往生一門。所以終日念佛、而不
乖於無念、熾然往生、而不乖於無生。故能凡聖、各住自位、
而感應道交、東西不相往來、而神遷淨域、此不可得、而致
詰也。故經云、若人聞說阿彌陀佛、執持名號、乃至是人終
時、心不顛倒、卽得往生阿彌陀佛、極樂國土。夫如來世尊、
雖分折攝二門、現居淨穢兩土、然本聖之意、豈直以娑婆國
土、丘陵坑坎、五趣雜居、土石諸山、穢惡充滿、以是爲可
厭。極機世界、□金爲地、□樹參
(以下、半葉損亡)

世界、水鳥樹林、咸宣妙法、正報清淨、無實女人。然則修
行緣具、無若西方。淺信之人、橫生疑謗、竊嘗論之。此方
之人、無不厭俗舍之喧煩、慕蘭若之寂靜。故有捨家出家、
則慇懃讚歎、而娑婆衆苦、何止俗舍之喧煩、極樂優遊、豈

鎮陽洪濟禪院慈覺和尚勸化文并偈頌

門人 普惠 編

直蘭若之寂靜、知出家爲義、而不願往生、其惑一也。萬里辛勦、遠求知識者、蓋以發明大事、決擇死生。而彌陀世尊、色心業勝、願力弘深、一演圓音、無不明契。願參知識、而不欲見佛、其惑二也。叢林廣衆、皆樂栖遲、少衆道場、不欲依附、而極樂世界、一生補處、其數甚多、諸上善人、俱會一處、旣欲親近叢林、而不慕清淨海衆、其惑三也。此方之人、上壽不過百歲、而童癡老耄、疾病相仍、昏沈睡眠、常居太半、菩薩猶昏隔陰、聲聞尙昧出胎。則尺壁寸陰、十喪其九、而未登不退、可謂寒心。西方之人、壽命無量、一託蓮苞、更無死苦、相續無間、直至菩提。所以便獲阿惟越致、佛階決定可期、流轉娑婆促景、而迷於淨土長年、其惑四也。若乃位居不退、果證無生、在欲無欲、居塵不塵、方能興無緣慈、運同體悲、迴入塵勞、和光五濁、其有淺聞單慧。或與少善相應、便謂永出四流、高超十地、抵訶淨土、耽戀娑婆、掩目空歸、宛然流浪、並肩牛馬、接武泥犁、不知自是何人、擬比大權菩薩、其惑五也。故經云、應當發願、願生彼國、則不信諸佛誠言、不願往生淨土、豈不甚迷哉。若夫信佛言、而生淨土、則界繫之所不能拘、劫波之所不能害、謝人間之八苦、無天上之五衰、尚無惡道之名、何況有實。唯一乘之法、決定無二、歸依一體三寶、奉事十方如來、佛光照體、萬惑潛消、法味滋神、六通具足。三十七品助道法、應念圓成、三十二應隨類身、遍塵刹土、周旋五趣、普

被諸根、不動一心、遍行三昧、洒定水於三千、引衆生於火宅、自利利他皆悉圓滿。然則惟心淨土、自性彌陀、蓋解脫之要門、修行之捷逕。是以了義大乘、無不指歸淨土、前賢後聖、自他皆願往生。凡以欲得度人、先須自度故也。嗚呼人無遠慮、必有近憂、一失人身、萬劫深悔。故率大海衆、各念彌陀佛、百聲千聲迺至萬聲、迴向同緣、願生彼國。竊冀蓮池勝會、金地法朋、綺互相資、必諳斯願、操舟順水、更加櫓棹之功、則十萬之遙可不勞而至也。

元祐四年冬、宗贊、夜夢一男子、烏巾白衣、可三十許、風貌清美、舉措閑雅、揖謂宗贊曰、欲入公彌陀會、告書一名。宗贊乃取蓮池勝會錄、秉筆問曰、公何名。白衣者云、名普慧。宗贊書已。白衣者云、家兄亦會上名。宗贊問曰、令兄何名。白衣云、家兄名普賢。白衣者遂隱。宗贊覺而詢諸宿、皆云、華嚴離世間品、有二大菩薩、名宗贊、以爲佛子行佛事、助佛揚化、必有賢聖幽贊。然預此會者、亦豈小緣、普賢變名易號。不知誰何、今更以二大菩薩爲首云。

念佛懺悔文

其甲、普及四恩三有、法界衆生、法身壽命、本智光明。與阿彌陀佛同一體性、而無量劫來、不了自心、起惑造業。或不孝父母、不順師長、殘忍無慈、殺生偷盜、不淨邪淫、妄言绮語、兩舌惡口、及貪嗔癡十惡、纖然無罪不造、隨順邪

師、不信三寶。或破五戒、八戒、十戒、二十五戒、二百五十戒、五百戒、十重四十八輕。三千威儀、八萬細行、具足闡提、撥無因果、誹謗大乘、方等經典、破人善事、無悲憫心、不肯勸進、同梵行者。乃至殺父殺母、殺和尚阿闍梨、出佛身血、破羯磨、轉法輪僧、殺阿羅漢、破塔壞寺、殘毀經像、驅役僧徒。或令罷道侵損互用、現前十方、三寶財物、不淨說法、汙梵行人。如是普於三寶聖衆、師長父母、法界衆生、造種種罪。或自作教他、或見作隨喜、重重重重、無盡無盡、遍周法界、充塞虛空、今對阿彌陀佛、皆悉懺悔。

唯願阿彌陀佛威神力、故如湯消水應念化、成無上知覺。又復、阿彌陀佛四十八願、憐憫有情、放淨光明、攝取不捨、所居極樂、衆寶莊嚴、菩薩往生、永不退轉、脩行無間、直至菩提。本師釋迦牟尼、及十方諸佛、殷勤勸讚一念、乃至十念、一日乃至七日、稱名繫念、決定往生。我等愚迷、不信不順、或時聞已、心則輕笑、見念佛人、惡心毀破。設有信者、無決定心、若存若亡、或進或退、業緣深重、世務牽纏、身在道場、心緣世諦、口談極樂、意戀娑婆、於念佛時、心多散動、三種淨業、片善無成、十六觀心、一事不徹。臨命終時、或遭橫死、墮崩屋倒、樹折巖摧、水火漂焚、蟲傷獸齧、刀兵遽至、毒藥暴傷、卒病臨身、不遑念佛、或纏綿重、病苦迫身、心死轉號呼。難安正念、或無善友、助發淨因由是。種種罪障因緣、臨命終時、不得見佛、不得往生。

淨土還復、流轉娑婆、五濁惡世、三塗八難、隨業受生、五痛五燒、爲最極苦。未來生死、無有盡期、或墮胎生、金鎖之難、五百歲中、不得見佛。此皆從昔已來、不信阿彌陀佛、不信往生淨土、身口意業、輕慢毀謗、以是因緣、雖復發心、多諸障難。我今稽首阿彌陀佛、唯願天眼見我、天耳聞我、他心鑒我、大慈大悲、哀憫攝受、聽我懺悔、令我普及四恩三有、法界衆生。罪障業障、煩惱障所知障、不信佛言障、懶惰修行障、三塗長夜障、五濁惡世障、邊地疑城障、不聞三寶障、凡是往生一毫之障、悉願消除。一切清淨、正信現前、不疑不退、決定往生、極樂世界、速成正覺、轉大法輪、圓滿普賢、廣大行願。懺悔已、歸命禮阿彌陀佛。

念佛發願文

願其甲、普及四恩三有、法界衆生、從今已去、安住第一義、諦脩佛淨業正因。孝養父母、奉事師長、慈心不殺、脩十善業、受持三歸、具足衆戒、不犯威儀、發菩提心、深信因果、讀誦大乘。勸進行者、念佛念法念僧、念戒念施、念第一義天、以至誠心、深心回向。發願、心稱佛名號、讚佛光明、觀佛依正十六妙境。念佛本起四十八願、籌量三輩、深入五門、隨順三種菩提門、信受十方諸佛教。或以散心定心、而脩散善定善、依經起行、畢命爲期。唯願阿彌陀佛法力冥加、神通顯益、令我等凝神覺路、暗踏大方、進止威儀、不離見

佛。如執明鏡自見面像、及於夢中、常見彼國衆妙樂事、慰悅我心、令生增進、哀憫覆護、法種增長、承佛威神、遠離魔事。又復無量劫來業惑塵勞、皆爲梵行、善根功德、同入

大因、積集諸緣、併用回向。臨命終時、無諸障難、七日已

前、預知時至、身無痛苦、心不顛倒、身心安樂、如入禪定、遇善知識、教稱十念。阿彌陀佛與諸聖衆、現在其前、放大光明、授手迎接、自見其身、乘金剛臺、隨從佛後、如彈指頃、往生彼國、生彼國已。見佛色身、衆相具足、見諸菩薩、

像前、虔奉香花、發此大願。

色相具足、光明寶林、演說妙法、聞已卽悟無生法忍。身真金色、等無差別、三十二相、六通自在、具大辯才、演一切智。那羅延身、壽命無量、供養如意、妙服自然、不聞惡名、

不著身見、諸上善人、俱會一處、住正定聚、永不退還、究竟至於一生補處、受用清淨、大乘法樂。晝夜六時供養阿彌

陀佛、每日清旦奉事、十方如來、聞法受記、得陀羅尼、化身自在、周遍十方、無佛國中、成等正覺。極重苦處、遊戲神通、隨衆生心、應所知量、對現色身、晝夜說法、無有休息。念念中、令不可說、不可說衆生、發菩提心。念念中、令不可說、不可說衆生、住普賢行。福慧資糧、悉得圓滿、同成無上正等菩提、各各莊嚴淨土、各各攝化衆生、如阿彌陀佛等無有異。唯願阿彌陀佛慈悲證明、所有虛空世界盡、衆生及業煩惱盡。如是一切無盡時、我願究竟常無盡。發願已、歸命禮阿彌陀佛。

發菩提心要略法門依華嚴經集

悲先應深信三寶、恭敬供養、然後決定勇猛、立大誓願。

南無佛、南無法、南無僧。我今發心、不爲自求人天福報、緣覺聲聞、乃至權乘諸位菩薩。唯依最上乘發菩提心。願與法界衆生、一時同得阿耨多羅三藐三菩提。如是三說、亦應每日、或六時三時一時、於尊

南無佛、南無法、南無僧。我今發心、不爲自求人天福報、緣覺聲聞、乃至權乘諸位菩薩。唯依最上乘發菩提心。願與法界衆生、一時同得阿耨多羅三藐三菩提。如是三說、亦應每日、或六時三時一時、於尊

發心之後、隨其所脩、一一善業、皆悉迴向、願成阿耨多羅三藐三菩提。亦應常勸一切衆生發菩提心。彼若不能、當須代發。

勸念阿彌陀佛防退方便二首辨頌

普勸道友。日念阿彌陀佛、或百聲千聲、乃至萬聲、迴願往生西方淨土、各於日下、以十字記之。念佛之時、一心專注、不得異緣、常念娑婆衆苦、五濁煎熬。況乎一失人身、何時可復。幸諸道友、終始精勤、寶蓮華中、決定見佛。

三界炎炎如火聚、道人未是安身處、蓮池勝友待多時、收拾身心好歸去。

目想心存望聖儀、直須念念勿生疑、他年淨土華開處、記取娑婆念佛時。

淨土頌

西方多樂事、浩劫杳難宣、壽量曾無盡、光明豈有邊。
道風吹綠蕙、定水發紅蓮、海會朝宗處、天花落座前。
海衆咸清淨、菩提道易成、心心皆正念、物物契真乘。
性地瑠璃瑩、圓音衆鳥鳴、會須登覺岸、莫遣墮疑城。
足蹈無憂地、身居不老鄉、六時朝聖王、清旦詣他方。
寶殿隨身去、天花遍利香、歸來還本住、禪悅未何長。
莫謂西方遠、西方在目前、雖然過十萬、曾不離三千。
念佛纔開口、花池已種蓮、信心如不退、決定禮金懺。
池凝功德水、風動管絃音、羅網慢空界、樓臺映寶林。
六根常合道、萬境了唯心、不是人難到、都緣信未深。
行業分三輩、蓮花共一池、既然登極樂、決定獲阿惟。
障盡舒光日、心開見佛時、今中無限樂、同道者方知。
極樂真如理、彌陀智慧光、迷時沈此土、悟即往西方。
浩浩輪迴息、迢迢壽命長、信根纔一念、心地已清涼。
信重終須往、疑多未可知、淨心憑一念、功行越僧祇。
更列阿惟位、還將補住齊、進修宜勇猛、不必待多時。
人間禪家者、宗門萬事忘、既然超極樂、何必往西方。
卻聽禪家語、西方是本鄉、馬鳴親訓誨、龍樹亦稱揚。
莫詬娑婆苦、娑婆苦殺人、貪嗔癡亂意、皮肉血爲身。
羅刹怨憎窟、無明陰入村、會須登極樂、歸路莫因循。
莫詬娑婆苦、娑婆苦最深、邪魔常作伴、疾病每相侵。

聲色妖姪地、禪那淡泊心、會須登極樂、歸路莫沈吟。

莫詬娑婆苦、令人涕淚交、三灾輪內轉、五痛火中燒。
鶴樹光長掩、龍華會正遙、會須登極樂、歸路莫辭勞。

莫詬娑婆苦、韋提白世尊、却逢煩惱濁、兒號未生冤。
調達心何逆、瓶沙恨莫論、會須登極樂、此惡未嘗聞。

極樂不離真法界、彌陀卽是自心王、眉間毫相無方所、露柱
燈籠亦放光。想修齋戒莫因循、千聖同開念佛門、一旦功成
歸淨土、白毫光裏奉慈尊。

戒酒肉文

夫、有爲雖僞棄之、則功行不成、無爲雖真趣之、則聖果難
尅。剎那悟道、要須長劫練磨、頓悟一心、必假圓脩萬行。
身田未淨、法器難成、世味不忘、寧專妙道。況夫三界之內、
六道之中、衆生皆我父母、四大皆我故身。菩薩大悲、猶護
生草、凡夫蠶行、反食衆生肉非自然。皆從斷命、殺他活「
」、痛哉可傷。探其根源、實非清淨、推其敗壞、不忍見聞。人
方耽昧、自謂甘香、淨眼傍觀、如啖臘血。人羊相食、因果
無差、命債轉多、如何解脫。至若酒、爲毒水濁亂、有情三
十六失之、禍胎八萬塵勞之。業海未了、真心常居、幻夢況
資、狂藥轉墮、迷途醺醺、竟日兀兀、浮生如以全身自投糟
甕。況復一杯、才舉萬禍、潛生五刑、三千據款結。案世尊
制戒、尙禁毛頭、過酒器與人、五百世無手。故知、酒肉爲

患極深。雖快一時之心、終嬰萬劫之苦。蔬食度世清樂、有餘般若、光中精脩、梵行隨緣、銷舊業更莫造新殃。若欲改往、修來便請、一刀兩段、其如習力、深重且戒、日中已前、非唯匹下、有餘亦乃修行有漸。所以道、莫因三寸舌、空負百年身。努力勤修、同登妙覺。

坐禪儀

夫學般若菩薩、先當起大悲心、發弘誓願。精修三昧、誓度衆生。不爲一身獨求解脫。爾乃放捨諸緣、休息萬事、身心一如、動靜無間。量其飲食、不多不少、調其睡眠、不節不怠。欲坐禪時、於閑靜處、厚敷坐物、寬繫衣帶、令威儀齊整。然後結跏趺坐、先以右足安左脣、上左足安右脣上、或半加趺坐亦可。但以左足、壓右足而已。以以右手、安左足上、左掌安右掌上、以兩手大拇指面相柱。徐徐舉身前缺、復左右搖振、乃正身端坐、不得左傾右側前躬後仰。令腰脊頭項骨節相柱狀如浮屠。又不得聳身太過令人氣急不安。要令耳與肩對、鼻與臍對。舌柱上腭、唇齒相著、目須微開。免致昏睡。若得禪定、其力最勝。古有習定高僧、坐當開目。向法雲圓通禪師、亦訶人閉目坐禪、以謂黑山鬼窟。蓋有深旨、達者知焉。身相既定、氣息既調、然後寬放臍腹、一切善惡、都莫思量。念起卽覺、覺之卽无。久久忘緣、自成一片。此坐禪之要術也。竊謂、坐禪乃安樂法門。而人多致疾

自贊文

者、蓋不善用心故也。若善得此意、則自然四大輕安、精神爽利、正念分明、法味資神、寂然清樂。若已有發明者、可謂、如龍得水、似虎靠山。若未有發明者、亦乃因風吹火、用力不多。但辦肯心、必不相賺。然而道高魔盛逆順萬端。但令正念現前、一切不能留礙。如楞嚴經·天臺止觀·圭峯脩證儀、具明魔事。預備不虞者、不可不知也。若欲出定、徐徐動身、安詳而起、不得卒暴。出定之後、一切時中、常作方便、護持定力、如護嬰兒、卽定力易成矣。夫禪定一門、最爲急務。若不安禪靜慮、到這裏惣須茫然。所以探珠、宜靜浪。動水取應難、定水澄清、心珠自現。故圓覺經云、無礙清淨慧、皆依禪定生。法華經云、在於閑處、修攝其心、安住不動、如須彌山。是知、超凡越聖、必假靜緣。坐脫立亡、須憑定力、一生取辦、尙恐蹉。況乃遷延。將何敵業。故古人云、若無定力、甘伏死門、掩目空歸、宛然流浪。幸諸禪友、三復斯文、自利利他、同成正覺。

神心洞照、聖默爲宗。旣啓三緘、宜遵四實。事開聖說、理合金文。方能輔翼教乘、光揚祖道、利他自利、功不浪施。若乃竊議朝廷政事、私評郡縣官僚、講國土之豐凶、論風俗之美惡、以至工商細務、市井閑談、邊鄙兵戈、中原寇賊、文章伎藝、衣食貨財、自恃已長、隱他好事、揄揚顯過、指

摘微瑕。既乖福業、無益道心。如此游言、並傷實德、坐銷信施。仰媿龍天、罪始濫觴、禍終滅頂。何也、衆生苦火、四面俱焚。豈可安然坐談無義。

在家菩薩脩行儀

在家菩薩、先當事佛、務極嚴謹、永斷葷酒、堅守齋法。於諸慾染、誓不擬犯、親近知識、發明己見、隨其悟入、如理修行。若初心之士、未能頓除葷酒、且食早素。一月之間、已能減半、久習淳熟、自能永斷。未能長齋、及欲障厚者、先且奉行五戒、然後進登菩薩清淨大戒。若未能親近知識者、但應讀誦大乘、助發正見。若未悟摩訶般若者、但依佛語脩行、時中亦不虛棄。學般若菩薩、應當勤發願云、南無佛南無法南無僧、願身心安樂、進道無魔、般若光中、精脩梵行、念念之間、常以般若供養十方諸佛、念念之間、常以般若發悟一切衆生。普願一切衆生、頓悟摩訶般若波羅蜜多、同成無上正遍知覺。

事親佛事

夫、孝子之事親也、日以鷄鳴盥_音漱畢、敬念精誠立於寢門之外、微聲聲歛、安詳而入。溫恭省問安否如何、起則奉其衣服、沃_音盥_音奉其漿水、所服湯藥等、而後進徐稟。晨羞_音饌、何物更益、珍甘盡其精、制視其寒溫、嘗其旨否。父

母嗜之、則喜色見於面目、喜氣達於音聲。意所不欲、則敬請易饌、固無他命、則下色怡聲、勉以強食。問其所以、微或不康、則具湯藥、而進之事。竟而食、則視於父母、而爲多少。食已進、見問其起居、言必雍容、盡於愛敬、先意承志、務達其心。疾痛醫養、敬抑搔之、出入臥起、敬扶持之。果實湯茗、隨意而具、沐浴洗_音、燭_音尋湯而請。復問晡時欲何飲食、侍奉之儀、皆倣前式。父母所處、冬則燠密、夏則清涼。父母欲寢、則相其裯席厚薄、必使安體、衾綢單複、務於適宜、寒則溫衾、熱則扇枕、俟其安寢。然後退宿、復思明日之事焉。此猶世間之孝也。當念三途長夜、惡趣輪廻、雖欲報恩、如何息苦。應於朝夕、勸進父母、歸依三寶、發菩提心、調伏貪嗔、不昧因果、披尋古教、瞻禮聖容、於佛禁戒、隨力奉持、發明大事、因緣修習、念佛三昧、或行檀以助道、或宴坐以澄神。此皆未來成佛之因、歷劫無窮之孝事親、至此不可以有加矣。

豪門佛事

竊以、良田萬頃、日食二升、大廈千間、夜眠八尺。黃金潤屋、誰諱閭閻、白玉堆山、終歸夢幻。若是作家手段、便須勇猛修行、發最上菩提之心行、傑出世間之孝。參真善知識、爲立地成佛之人、依圓頓大乘入位、後普賢之行應、是從前虎狼心行。蛇蝎性靈與一切人、爲災爲害、耽荒酒色烹宰禽

魚、籠繫衆生、飛鷹走犬。乃至乞求乳母、性命交加、婢畜精疤、禍通水陸、如是等類、皆不應作。然後、治生產業、先願利他、雖獲俗利、不以爲喜、常行謙下、莫縱驕奢。須信不癡、不聾不作、阿家阿翁、但無私己之心、即是大人之相。貧窮老幼、曲爲悲憐、隣里親知、等心濟惠、因臨婢僕、各盡歡心。聽於己分之餘供給、所生父母、常荷金輪、統御文武、護持既有、家財須應等第。所謂泥多佛大、水長缸高、便須直下承當不得。日中逃影、莫以同情。升進格外、增添應憐、退落之家、隨宜減放。切忌、多招生戶、酌然衆口銷金。若非荷擔、衆生何表、大乘法器。幸身康健、火急修行、欲知金粟如來、便是維摩居士。

軍門佛事

竊以、諸軍將士、雖居用武之門、若善參詳自有脩行之路、目對旌旗之色、見性分明、耳聞金鼓之聲、圓音不昧。操弓執矢、各現神通、舞劍揮戈、遍身是手。高聲唱喏、起自何來、驟馬鞭身、承誰恩德。乃至執勞運力、無非菩薩行門。今者天下太平、軍中無事、全家飽暖、盡荷君恩。若在行間、莫生容易著衣喫鉢。唯恐、難消一片丹心、常思報國、內則孝養父母、外則敬順人員、親近良朋、求聞已過。怖今生之流落、百事小心思沒、後之沈淪、自求多福不得。賭錢喫酒、踰濫嘵嘵、鬪打相爭、妄言綺語、愛人便宜、管他閑事、輕

犯王法、毀謗三寶、忽若排連。階級次第、陞遷既是人員、須知疾苦。公心部轄、守己清廉、賞罰分明、作事平等、撫恤長行、兵士悲憐、老幼貧窮。雖然慈不主兵、且與暗行方便、尋常小罪、豈免擔擎。事不奈何、量時行遣、且大約計之、一營五百人、每家共三口、司空僕射、運菩薩心、卽一營之中、一千五百人安樂。員寮節級脩菩薩行、卽二都之內、三百人快活。由是龍天擁護、營幕光輝、自利利他、皆成佛事、非但今身、福壽蓋爲、累劫律梁。復願、世世生生、不迷本性、在在處處、常轉法輪、爲苦海之神舟、濟羣生於覺岸。

鄼中佛事

普勸諸行百戶、
脩真實慈悲行。

竊以、居鄼業市、萬別千差、門門古佛家風、各各道人活計。或作鬻香大長者、或現維摩彼上人、或爲投子賣油翁、或效趙州喫茶去、或販玄沙白紙、或賣青州布衫、或打神山之羅、或崇廬陵之米。所以、盤山肉案頭悟道、彌勒魚市裏接人、若能直下承當、可謂成佛有分。其或機輪未轉、智眼猶迷、且須據實修行、亦有超昇之路。先當歸依三寶、發菩提心、孝養三親、懇脩齋戒。或禪林問道、或古教照心、參詳日用之中萬事、須知損益。若夫心行、真實語言、真實買賣、真實斗秤、真實尺寸、真實物貨、真實材料、真實價例、真實錢陌、真實數目、真實州土、真實如是等類、皆所應作。或

以惡爲美、變舊爲新、潤乾爲濕、減大令小、添和外物、全假不真、異物相代。或罔昧官司、多圖國利、隱藏商稅、不懼公方、巧匠良工、神通變化。同財共本、遞互相謾、衣食主人、暗行侵盜、逋逃債負、抵諱不還、取息太傷、橫侵有利。或屠宰之家、殺生求利、烹庖血肉、販賣禽魚。或苦使驢驥、虐害牛馬。或雇他自活、誘陷良人。或酒肆陰謀生、姦坊度日。或造作弓箭、巧製鎗刀。如是等類、皆不應作。

始則知之、減半終則、慎之全無。再三廻互、不行決定、須當改業。由是心田廣大、氣宇高闊、視身世如浮雲、此黃金於糞土。肢體尙能、布施錐刀、何足掛懷、悲智自然增明、衣食自然豐足、不離市肆。已出塵埃、雖無瓔珞天冠、便是肉身菩薩。況復神接、安養定知、成佛無疑。嗚呼、一百二十行市、八萬四千塵勞、悟之者爲菩薩選佛之場、迷之者乃凡夫造業之地。譬如小器聚蚊啾啾、狂鬧微擅鬪蟻、擾擾紛爭、爲圖口飯片衣、只管欺賢罔聖。可謂、機關旋轉、巧智玲瓏、天眼龍睛、神出鬼沒。所以神龍忿怒、福德銷磨。縱然邪裏得來、又被業風吹卻、籃中携水、脫體全空、火上弄水、片時光景、只怪漏卮難滿。誰知、惡纏易盈、地獄阿傍、持又相待、鑊湯爐炭、定業難逃、漸次針咽、炬口依前、馬腹驢胎。縱然得箇、人身受盡、貧窮困苦、操瓢策杖、乞食巡門、四海無家。欲何依怙、飢寒內切、誰肯哀憐、命寄朝昏。身墳溝壑、三塗八難、萬劫千生、可怜慷慨。丈夫卻到、

這般田地所以特伸管見、願救頭燃。應是從前巧僞、一時拈放、一邊卻來、作箇實頭道人。所謂傍生路上、薰鼻牽廻、地獄門前、攔胸把住、滅餓咽喉中之火、解貧人衣下之珠、無上菩提、兩手分附。取要言之、常願利他、自利不得謾人自謾、諸觀三世諸佛、不出一箇實字。

公門佛事并頌

夫以、公門吏役、紛擾萬端、旣無聽法之緣、誰識修行之路。真如佛性、翻成功僞之心、平等真慈、流入貪殘之行。不覺老之將至、寧知身後如何、忽然墮落三塗、便是千生萬劫。所以恭陳十勸、普告未聞、庶興悲願之懷、念濟沈淪之苦。不捨凡夫事業、頓圓菩薩行門、西陪蓮社之遊、東受龍華之記。

一者、回心向道。竊以公事、無非佛事、公門卽是佛門。若能善用、其心種種、皆成法利、變業火作清涼之地、卽塵勞

爲解脫之鄉。上寬制御之勞、下息冤憎之苦。

萬緒紛紛業火煎、幾人甘露沃心田、

須知佛事無他事、卽此塵緣是道緣。

二者、忠報國家。旣乃分司列職、各有□專。常須子細精勤、不得因循鹵莽、而□全家衣食、仰給公門。若也公家悞事、便於私計不安、但存報國之心、自然公私俱濟。全家衣食仰公門、唯念精勤報國恩、

王事不前空飽暖、他年無地可容身。

三者、孝養父母。世出世間、以孝爲本。現在父母、即現在佛。有好衣、令父母著、有好食、令父母喫、有財物、令父母用。不作非違之事、恐貽父母之憂。至如早入公門、暮歸私舍、終日之間、父母之養、委在妻子、宜當謹察、勿縱麤心。其如侍養、不勤甘旨、不給了蘭木母、尙形泣淚之悲。父母肉身、寧不動念、父母既終、孝養無所。常行好事、常念濟人、資導神靈、往生淨土。

早供甘旨莫因循、謹率妻孥奉至親、

木母尙猶曾泣淚、老人爭得不傷神。

四者、不留獄訟。蓋以一人犯罪、舉族蒙惶、隣里親知、爲之不樂、將他喻已、豈可安然。若察其無罪、速令疎放歸家。若實有罪之人、早與結絕文案、乃至勾追、照證不得、引蔓生枝。若能如是、用心便是、與人安樂。

一家有罪百家憂、引蔓生枝早晚休、

要會與人安樂處、但於公事莫遲留。

五者、寬恤罪人。寒須暖獄、夏必涼牢。洒掃併除、常令淨潔、飢者與食、渴者與飲、寒者與衣、老者無令失所。病者粥藥扶持。等觀貧富、如我至親、縱饒情理、難容不得、心生耐耐、常以善言慰喻、勸令持念觀音。所冀、依憑聖力、別有解脫之門、無以麿言、故相寒熱人非、木石陰理昭然。

但有好心、必有好報。

飢寒老病要溫存、惡語爭如愛語親、
但有好心憐庶獄、自然陰報不虧人。

六者、減省刑禁。人間至苦、無甚獄囚、萬種悲酸、不堪名狀。時與暫寬禁繁慎、無非理摧殘至、於勘鞫之間、切爲減其鞭□重囚。若減一百十人、減得一千輕囚。若減五十人、減得五萬。如斯積累、已成無限陰功。況有妙門、更爲於中裁減。

畫地爲牢入尙難、那堪枷鎖重如山、

從來獄吏修陰德、只在無情檻櫈間。

七者、用法從輕。公案未成、先就情輕、推勘引條定罪、亦須宛轉。從輕明知、回牙稍難、更爲尋求出路。若於大小公案、逐一如是用心、天龍鬼神、常相祐護。設使官員執見、應當方便諮詢、但自公廉、勿憂罪責。

莫將殘忍害衆生、唯以眞慈運至平、
公案不須論大小、一時先且問情輕。

八者、護持三寶。末法僧尼、豈容無罪。第一且看、佛面再過、尙許贖刑、僧尼悞觸、憲章寧無矜免。

吾門弟子日衰微、全在官司暗護持、
縱有萬般凡俗行、且留三事福田衣。

九者、全身遠害。或職名在上、或年事稍高、應當供敬、如父如兄。或乍入公門、或後生年少、應當愛之、如子如弟。

官員慈善、常須加意、小心忽若稍有、威嚴更是、不得慢易。切忌、耽迷酒色、枉費錢財、縱能非理、多求爭似、如法儉用。若乃主持官物、應須如護眼睛。常教出納分明、不得侵欺損壞、滅身之禍、無出貪婪、安樂法門、莫如清儉。人有言云、避法而安、知而不爲、冒法而險、爲而不知。此言甚好、返復思之。

俯仰謙和福自生、常思清儉畏嚴刑、

公家財物無多少、護惜應如護眼睛。

十者、隨力修行。有命之物、一蟻無傷、不義之財、一錢無取、斷除邪染、以口相應。對諸佛前、懺除先罪、發大弘願、誓證菩提。或守常齋、或持常素。或未能永斷葷酒、且戒日中已前。或參禪問道、契佛心宗。或讀誦大乘、薰發正見。或兼修衆善、深種福田。或專念彌陀、求生淨土。但知隨力隨分、皆爲成佛正因。若能相勸奉持、便是燈燈續焰。

公門何處不修行、戒定熏修道愈精、從此利他兼自利、一輪明月照寰瀛。

人生未悟歌

輔國大師 撰

夫、說娑婆界內、五濁世中、有八萬四千塵勞、具六十二種邪見。自迷本覺、未悟真如、恆居生死界中、似蟻巡環長在。四生之內、如輪碾道、萬類忙忙、只貪現在之歡、凡凡癡癡、豈憚當來之業。戒香定香惠香、豈肯焚修。貪心嗔心癡心、

恆時熾盛。觀三寶則、目視雲霄、聞善事則、佯佯不聽。隨從惡黨、順似波濤、違害良緣、逆如荆棘。不思惡路、無意修行、貪戀浮花、嗜著財色。縱意則忙擾追求、如渴鹿逐於春陽、恣情則迤邐貪婪、似飛蛾投於聚火。不觀此體四大、所成未顧、斯身五蘊積聚、世似風燈。命如石火年光、一似水上浮沤、色力恰始草端之露、作業自成、何殊造蠶之蠶。食飽長閑、有似守家之犬。況復四蛇逼迫、二鼠交侵、妄心爲六、境所牽癡、意被千迴八拽。六根顛倒、八識惛迷、有限色身無常、雪體鴟鬟、倏忽成霜玉兒、逡巡變鬼選甚。王侯將相不論、貴賤高低、老苦隨身、病緣悲切。形容改變、剋限有期、一息歸空、對面千里、滿庫珍財、終歸他物。惟有荒郊丘塚、卻是自家住處。假使夫力如神、妻兒若玉、時至後財寶無量、奴婢豐多、一旦死至、頓然割捨三寸氣斷、雙目光落四肢俱冷、一時消逝始。生前無毫善之心、死後有乖離之狀、口中只舍精錢兩文、面上祇蓋白練一片。餘外資財能得將歸身邊、唯有葷席一領木樞一具。只此相應作伴眷屬、悲切兒女號咷奔送、在於荒郊嗟嘆、咸歸故里、平生志氣、獨處虛雲。一旦長辭永占、霜月忙忙、兒女搥胸、妻子哭斷肝腸。諸有智者、如何不驚惶、如何不驚怖。前念既滅、後念仍存、業引波濤、冤遊地獄、鑊湯滾沸。駈入則肉便熟爛、鐵床輝炎、叉上則乾焦俱碎。飢吞鐵丸、五臟燒燃、渴飲銅、四肢炎起、刀山峭峻、難攀痛苦。與他登劍樹霜峯、號

咷努力、與他上痛苦千畳、惄惶無限、自嗟嘆身。雖有親情兒女、到此何能相救。縱有美婦貞妻、到此恩情斷絕。若有僮僕知識、到此不能交涉。滿庫珍寶財物、到此不能贍之苦痛尤深、時稍長遠。此者皆是己身、自作自受。凡有心識之人、若是如此了達、如此險難、能得不驚惶、能得不驚怖、更有何意。放逸則有、似於騰猿、縱身則若於狂象。只貪滋味、無不是肥肉美酒、作悅□香、無不是薰蘭麝、體受妙服者、無不是珠玉綺羅、耳樂嬉聲、無不是錦衾絲竹。假如便作金輪勝王、七寶千子王四天下、世間快樂、最爲第一。若是了達、且在危厄、來世苦惱、亦可厭之。何況凡塵弊五欲塵境、戀之不肯捨、貪之不肯休、如饑狗嚼於枯骨、似蒼蠅唼於糞團。雖聞前法、受僧家教、事又不肯依行、將爲此身、永在人間、長壽安樂。若你身心安樂、諸根圓備、受命長遠。

其奈有老苦病苦死苦、不覺便是到來、如牽羊入於屠肆、駢囚入於法場。望活則一腳腳遠、去死則一步步近。雖復家有千金、官居九品、良田萬傾、墅地百區、一旦死至、財不能贍之。更有一類人、多嗜著年花少俊、多嗜著才藝過人、多嗜著身手有力、多嗜著家計豪強。菩薩戒云、人命無常、過於山水、今日雖存、明亦難保。莫教此身明日來、墜在諸趣之中、受苦長劫。恁時欲要、似今日身安健心、從款執香爐、掐數珠、念佛名號、持佛禁戒、禮佛形像、必不可得衆人等、恁時悔將何及。

未悟歌 鄭師撰

每傷世事、不覺長歎。貪求名利者、忙忙似火、持齋念佛者、凡凡如閑。不思隨喜、唯慕攀緣。親者貧而不秋頓棄、疎者富而曲奉多畳。非違有道、但縱無端、男兒愛腰排玉珮、女子樂耳墜金環。食恣珍饌、服飾羅紈。不念耕夫織婦、終朝忍餓受飢。心因行於正直、性貪惟於曲盤、駢榮奴僕、焉知險難。任情刑罰恣、意傷殘馬。前後呼呼喝喝門、內外簇簇攢攢要、打者叫聲動地要、罵者悖氣衝天失。之則立便枷虐得、之則當下始安誅。剥黎庶只推、閔官又不知。興廢在僻傾之際、在亡當瞬息之間。一旦身謝、命掩幽泉面、覆片白口、舍兩錢財物。被衆人分割、自家卻獨受。迨遭殺鬼駢後、琰魔面前業縛。或手足背栓、或儻馳於屍糞、或逼迫於倒懸、或鑊湯煮、或利火燃入。便經百千劫、更其有大月長年痛、如斯之極苦、求勉脫以無緣。亡人筭未百日、妻子早別選官員。哀哉、此事一一寧宣、又何不早脫後患。速懺前愆、親近善友、追慕良緣、恆待陰隲、每奉聖賢。若斯□者、□護流報、意以證因果周圓。是故有智君子、忽修因而儼然。

慈覺禪師勸化文竟

□□□佛憫

*右の翻刻に際し、文字は旧字体（正字）に統一したが、珍しい異体字はそのままとした。また、原文の「已」は文意により巳・己・己のいずれかに組んだ。句読点は筆者が付した。